護国寺の寺報

その想い

第９号
発行人：谷泰智
29年9月10日発行

佐々井秀嶺（シュウレイ）氏の講演を拝聴

仏教がインドで生まれたことは誰もが知っていることですが、実は１３世紀からの近代までインドの仏教徒はほぼゼロに等しかったのです。

そんなインドでは未だ人権の光が十分に当らない人々が存在します。佐々井氏はそんな社会的弱者の人々の為、龍樹菩薩（リュウジュ）の化身となって仏教の復興運動に粉骨砕身の貢献を果たされました。開催地の土佐町の方々に繰り返し感謝の言葉を述べられていて、とても感銘を受けました。

（秀嶺師の功績によって現在インドの仏教徒は１千万人を超えています）

日高村観光ガイドのお手伝い

現在、不定期ではありますが日高村の観光ガイドの一員として、主に猿田洞探検ツアーとメダカ池周辺のフットパスのガイドをお手伝いしております。

「地域の発展無くして寺院の発展はあり得ない」をモットーに、自らの本分に支障が出ない範囲で村の観光事業に関わらせてもらっています。また、大滝山はもとより猿田洞までを繋ぐルートを整備し、単なる観光地にとどまらず、ゆくゆくはかつての『修験道（シュゲンドウ）の行場としての大滝山と猿田洞』を再興するために、着々と活動を進めております。日高村は何もない村なんかじゃなかったですよ。(^^)/

仏教の歴史を学んでみませんか？

「仏教を学ぶ」と一言でいっても、人それぞれの仏教があることが事実です。例えば、作法を学ぶ、お経を学ぶ、哲学を学ぶ、理屈はさておき修行に入る・・・など、仏教はあまりに多面的です。けれども、それがどのように生まれ発展し、そして展開してきたのか？その全体像を大まかなりにも掴むにはやはり仏教の歴史を学ぶのが一番の近道です。

一見すると捉えどころがなく難解なように見える仏教の歴史ですが、大筋の流れを掴むことで想像以上の益がもたらされます。

私の計画では、第１部を１年かけて月に１度ずつ、予備知識ゼロを前提でいちから丁寧に解説していきます。参加者が１０名以上であれば来年初頭から始めます。是非、お気軽にお問い合わせ下さい。☺

〈仏教史概説〉

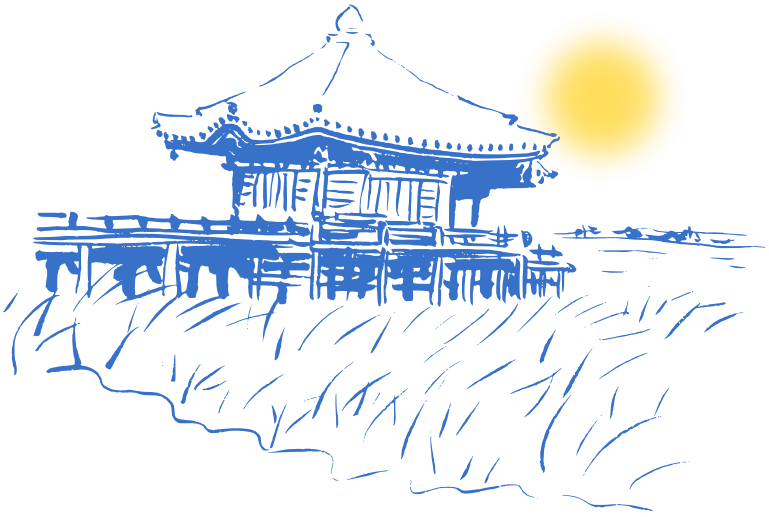
第一部
- 序章：仏教が生まれる前のインド
- １章：ガウタマ・シッダールタの誕生
- ２章：ブッダとして人々に求められる
- ３章：ブッダ入寂、経典の誕生と神格化されるブッダ
- ４章：西域、中央アジア、そして中国仏教

第二部
- ５章：国政と仏教、日本仏教の夜明け
- ６章：平安時代の仏教
- ７章：鎌倉仏教、日本人の仏教
- ８章：民間信仰の隆盛、日本仏教の完成
- ９章：現代仏教の課題

海抜０ｍから富士山の頂上へ登ります

同宗の大先輩が先達を務める峰入り修行に参加します。富士市の田子の浦海岸で水垢離の清めをし、村山古道から富士宮ルートで頂上を目指し、下山後は青木ヶ原樹海から富嶽風穴を経て精進子へ抜ける行程です。この修行を機に修験者としての初心に立ち返り、よく自らを省みて精進して参ります。

回りて向かう　～戒名の話し（後半）～



前回からの続きです。

普段の檀家様との関わりの中で最も話題に上がるのが、戒名の上につく『院号』のことです。

経験上偶にあるのが、お葬式の場で「うちは代々院号がついてるのにどうして今回は無いの？」と訝し気に問われることです。

私はめったに通夜葬儀の場で院号をつけません。なぜなら本来、院号は故人様の生前の意向や御遺族の意志によってつけられるべきだからです。

そもそも、院号の院とは寺院の院を表し、つまりは寺の名前を意味しているのです。さらにその寺はこの世で建立されるものでは無く、あの世で、つまり浄土の世界で仏弟子修行の拠点となるお堂のことなのです。

それを踏まえて考えると、院号がついた故人様は院号がついていない故人様に比べて『より気合いの入った仏弟子』というわけで、事実、特に信仰の篤かった方に院号はつけられる傾向があります。

ここで『より気合いの入った仏弟子』という表現を用いたのは、院号＝偉い、という皆さんの思い込みを払拭していただく為です。ですから、生前に社長をしていたからとか、とても人望が厚い人であったとか、さらにはたとえ百歳の長寿を全うされたとしても、原理的には院号がつく直接の理由にはならないのです。あくまでも、『浄土で寺を建てて更なる修行に励みたい！』という仏教的で且つ前向きな気持ちを反映したものが院号の主意であります。

我々の宗派では、故人様の魂は基本的に四十九日まで住み慣れたお家に留まっておられると考えます。ですから、葬儀の後でも四十九日までに院号を戒名につけ足せば何の問題もないことがご理解いただけるかと思います。

我が家の家柄、家風、格式、名誉、などなど確かに尊ばれるべきものですが、出世間（シュツセケン）の浄土には何一つ持っていくことが出来ず、亡くなられた方々は仏様のもとでは皆平等なのです。故人様の生前の発心はもちろん、遺徳を偲び浄土での更なる仏果増進（ブッカゾウシン）を願う御遺族からの意向として院号がつけられる、そしてその手助けをさせていただくのが僧侶の役目であると私は考えています。

次に、戒名の下につく『位号（イゴウ）』ですが、これも院号と同じく何かの偉さを示すものではなく、亡くなられた時の年齢、さらには信仰心や悟りの深さを表します。

年齢による区分は宗派によって様々ですが、概ね０歳～１歳を嬰子（エイシ）、２歳～７歳頃を孩子（ガイシ）、８歳～１５歳頃までを童子（ドウジ）とし、女の子であった場合は〔子〕がすべて〔女〕と表記される場合もあります。

そして昔の日本は一般的に１６歳からが成人でしたので、この歳から時が経って何歳で亡くなられても基本的には信士（シンジ）と信女（シンニョ）になります。

信士と信女に対応するものとして居士（コジ）と大姉（ダイシ）がありますが、これが先に述べました信仰心と悟りの深さによる違いです。それ故、院号がついた場合の位号はほとんどが居士と大姉になることが多いです。その他、最近では少なくなったと言われる禅定門（ゼンジョウモン）や院殿（インデン）などは、その違いをより強調したものであり、あくまでも『偉い』わけでは無いのです。

最後になりますが、聖武天皇の戒名が『勝満』であったように、全ての戒名は厳密に言うと２文字しかないのです。護国寺での戒名は全て４文字の形になります。実はこの内の前の２文字が道号（ドウゴウ）と呼ばれ、故人様の遺徳や人柄を反映した文字がつけられやすいと言われています。

以上、実際は上で紹介しました院号・道号・位号を全てまとめて戒名と呼ぶことが一般的ですが、その中に俗名の一字が必ず入るかと言われれば、入らない時も確かにあります。けれどもそういう場合は、同じような意味の漢字や連想される漢字を用いて、間接的に俗名を反映させるやり方が採られます。

繰り返しますが、戒名は決して家柄や偉さを誇示するものではなく、あくまでも一仏弟子としての発心や生前の遺徳や長所を反映させたものであり、これからの時代そこに差別があってはならないのです。

✨檀家さんに聞く 佐川町黒岩　岩崎扶佐子さん

大皿に盛られた手作りのおばんざいが並ぶカウンターの奥、オーブンの中で表面だけ薄っすら焼かれた明太子の香ばしい香りが漂ってきました。

「良い感じやんか～♡、ふさちゃんこれベスト！」

こだわりの要望が見事に実現されたお客さんの声に、このお店を一人で切り盛りされる扶佐子さんの笑顔がこぼれます。

岩まだお父さん(ご主人)が生きちゅう時でね、今ちょうど坊さんが座っちゅうその席から店を見渡しながら「あぁ、落ち着くにゃ～。」って言うてくれてねぇ。

坊始められてから何年ぐらい経ちますか？

岩１４年ぐらいになるろうか。前のオーナーの人が店を閉めてからひと月ない間にオープンしたのよ。電気の配線をし直したり、壁を塗り替えたり、お父さんと息子に手伝うてもろうてねぇ。

坊お店を続けて行く中で、何が一番大変でしたか？

岩ん～、やっぱり人間関係よねぇ・・・。お酒が入るとついつい言われ過ぎることもあったし。でも私も店を続けていく為に、言われて許せんことはズバッと言うきねぇ。そんで私まで呑んじょったら喧嘩になってしまうろう(笑)、だから昔から店では一滴も呑まんが。

坊料理を作るだけでも大変やのに聞き役までこなすのはさぞかし・・・。

岩お客さん同士でもいろんな話がされるきねぇ、そんな時は私はゴミ箱にならないかんがよ。店での話は家族にさえ話したことないきねぇ。

坊最初と比べて変わってきたことは何ですか？

岩お陰様で段々と常連さんも増えてきて、自然とお客さん同士で愚痴の言い合いをしてくれるようになって私も楽になった。(笑)

店開ける日は、午前中に買い出し行って午後は仕込みをするろう、それから１０時に締めるまで全部一人でやりゆがね。やき、たまにオーダーを忘れてしもうちゅう時もあって、そんな時はお客さんが優しく教えてくれる。「ふさちゃん、手が空いたら次〇〇お願いね～。」とか言うてくれてね、有難いことよ。

(←忙しい時の生ビールはお客さん自らサーバーに向かいます。♪)

坊正に人情酒場ですね～・・・。

岩やっぱり自分の心掛けを良くしていかないかん。年がいってお父さんにも先死なれて、そこからだんだんと見えてくるものがあって、自分の至らんところがようわかってくるのよねぇ。

我が家の仏壇は今は近所の息子の家にあるがやけど、いつも嫁さんがちゃんとご飯を供えてくれちゅう。私も毎日シキミの水を替えて「今日も店で皆が仲良く和気あいあいと居れますように。」って祈りゆうで。

〈 居酒屋ふさちゃん 〉

国道３３号線から越知の商店街に入ってすぐ、坂本葬儀社の斜め向かい。

〈 定休日 〉

木曜　・　日曜

お経のことば

もしも汝が、賢明で協同し行儀正しい明敏な同伴者を
得たならば、あらゆる危難にうち勝ち、こころ喜び、
気をおちつかせて、かれとともに歩め。

スッタニパータ　４５節　　訳　中村元（ハジメ）

今回のお経は、今まで紹介した法華経（ホケキョウ）や維摩経（ユイマキョウ）などの大乗経典とは趣を異にする、南伝仏教のパーリ仏典を紹介します。

パーリ仏典は別名パーリ三蔵（サンゾウ）とも言われ、三蔵とはお経そのものの経蔵（キョウゾウ）、当時の出家者の戒律や集団生活の規律などをまとめた律蔵（リツゾウ）、そして小難しい哲学が列挙された論蔵（ロンゾウ）の三つの構成になっています。

西遊記のモデルとして有名な玄奘（ゲンジョウ）は、中国仏教に於ける三蔵をしっかりと学び修めた高僧という意味で玄奘三蔵法師と呼ばれています。

うえのお経の言葉は、パーリ三蔵の中でも経蔵に属し、さらにその５部からなる経蔵の中の小部に収められています。実は、寺報第１号で紹介したダンマパダもこのパーリ経蔵小部に属し、スッタニパータと共に幾つかの原始経典の一部として近年注目され、これらは『ブッダのことば』と呼ばれます

スッタニパータの３５節から７５節までは『犀の角（サイノツノ）』という項目でまとめられていて、内容の違いはあっても、４５節以外の文の終わりは全て「犀の角のようにただ独り歩め。」となっています。ところがこの４５節だけ例外的に「かれとともに歩め。」となっていて、一際不思議な印象を与えています。

うえの言葉の中の『同伴者』とは本義では出家した僧侶という意味ですが、敢えて広く解釈して、友や仲間という意味で捉えても、そんな理想の同伴者はなかなか巡り合えるものではないでしょう。率直に言ってこの文からは、他人を見る目が厳しい、ある種潔癖な態度を要求されている感が否めません。

確かに、このスッタニパータは２５００年前のブッダ存命時の厳格な出家者の指針を示した経典であり、現在でこそ書物として読まれていますが、当時は言葉通りの丸暗記、つまり何度も何度も口に出して暗唱していたのです。そしてその内容はこれでもかというほどに孤独を讃えています。

でも逆説的に考えると、孤独を強く肯定して讃えることによってしか孤独を耐えることができなかったのではないかと、修行に人生の全てを賭けた僧侶達の切実な想いが窺えます。

そんな、孤独を強いる『犀の角』の中で、まるで一筋の光を放っているかのような「かれとともに歩め。」の文言・・・。

私はそれを希望だと思います。

近年は原始経典が世間一般に読まれるようになって久しく、現代人の求める合理性にも応える文言が確かに見受けられます。しかし、その一方では原始仏教の本意には当時の未熟な文明社会に対しての厭世感があることを忘れてはなりません。

けれども、ほんの一筋の光、つまり希望をお釈迦様は認めています。それは何も理想の同伴者を待ち望むのでは無く、そう在ろうとしてお互いに協同し合うという、『関わり合い』の可能性を謳っているのかもしれません。

お知らせ

- １０月５日～１０日　富士山峰入修行
  住職不在となりご不便おかけ致しますことご了承ください。
- １０月下旬頃　大滝山散策（詳細未定）
- 毎月２８日　柱源護摩供（ハシラモトゴマク）
  柱源護摩供は午前9時と午後3時の2回、参加費等無料です。
  ※葬儀が重なると変更される場合があります。

本山修験宗 大瀧山 護国寺
７８１－２１５５
高知県高岡郡日高村九頭２９１
☎　０８８９－２４－７２４４
ホームページ☞ gokokuji.site
仏事に関してのお悩み、ご質問、行事に関するお問い合わせ等、お気軽にお電話ください。